

中央アジアのトーテム象徴と日本の民話や伝説の繋がり

ジルキバエワ・シャラフアット

日本学研究者

要旨: 筆者は日本の伝承文学、殊に各地方の伝説と民話を日本語文献からカザフ語に翻訳してきた。この発表ではその作品に現れるトーテムイメージ(狼の文学的なイメージ)を分析する。筆者は「狼」という語彙の言語的、文化的な意味を中心として、その言葉の由来の謎を解くことに努めている。また日本の伝承文学と中央アジア(カザフ)の物語の共通点について語る。日本の物語に現れる「狼」と遊牧民にとってのトーテムとして想像される「狼」の歴史的、民族的な意味を分析する。

Abstract: In this report, the author provides analysis of the meaning of Central Asian folk symbol “wolf” and its connection with the Japanese legends and tales. The Japanese legends and tales, including “wolf” totemic symbol, were translated by the author and were analyzed linguistically and literary. By publishing research works in Japonology more than ten years, the author has been researching Japanese legends and tales from all areas of the country and has been translating them from Japanese into Kazakh language. In this report, other Central Asian ancient symbols in the context of Japanese folklore were analyzed as well.

筆者は十年以上アジア諸国の伝承文学に興味をもって伝説や民話、物語などの比較研究を行ってきたが、そのなかで特に没頭したのは日本の伝説や民話であった。日本の大昔の物語の魅力的な主題や主人公の動作また日本各地域の昔話の主要な主人公として現れる動物たちのイメージにも着目した。世界の伝承文学と中央アジアの物語の本を読んできた私は日本文学、すなわち、日出国の大昔の民話を日本語で読み始めたとき、自分の心に近い雰囲気を感じた。それは日本の伝説や民話や昔話と中央アジア、とくにカザフ(中央アジアの古典文学や文化といえはる大昔の遊牧時代が目に浮かぶ)の物語の共通点が多いからである。私が日本の伝承文学、殊に各地方の伝説と民話を五百冊以上の日本語文献からカザフ語に翻訳したのも日本に深い関心があったことによる。

皆に問うまでもなく、世界で日本に感心をもたない日本学者がいるだろうか。日本に興味をもったからこそ日本学者になるのではないか。私が日本に好意をもって翻訳した日本の民話や文学作品は、カザフスタンで出版した拙著『日出国の物語』(Жылқыбаева 2010)、『赤いもの謎』(Жылқыбаева 2013) に掲載されている。

さて、日本の伝承文学の中で筆者の目を引いた点は数多くあるが、ここではその1つについて述べたいと思う。古代の数多くの作品を見ると、主人公は人間であるほか、白鳥、鶴、狼、狐、熊、虎、等々の鳥獣のイメージも現れる。そこで次に、中央アジア、シベリア、モンゴル、等々のトーテムである狼の民話的な象徴の意味を分析してみよう。

狼は古から遊牧民話では神の象徴として、また民族的な象徴として認識されてきた。中央アジア、殊にカザフ民族の伝承文学に狼を主人公としている物語が数多くある。日本民話の研究をしてみると、十数以上の同様の作品を見つけることができた。日本の福岡県、中国地方、四国地方、中部地

方、東北地方などに残る伝説や民話に狼が主人公として現れる。ある伝説では狼は悩む人を助ける想像上の動物として現れる（瀬川他編 1973a, 60-65）かと思えば、別の民話ではある家族の娘を嫁にもらう人物的な主人公にかわります（瀬川他編 1973b, 190-192）。

中央アジアの同様の伝説に目を向けると、牝狼が、戦時に親をなくして孤児になった幼児に洞の中で乳を飲ませて、その子供が狼に育てられたため、狼が中央アジアの人々の始祖になった等々のストーリーが目に浮かぶ。なぜ狼は阿史那、匈奴、等々の氏族や遊牧民族の始祖になったのだろうか。「おおかみ」という獣の名前が一体どんな意味を持つだろうか。狼はイヌ科の哺乳類のほか「大神の意」（新村出（編）1993, 323）をもっており、いろいろな伝説や昔話で犬とか、山犬などの形でも表現されることに気がつく、カザフ民族が狼のことをボリ、カスキル、またイトクス（イトは犬、クスは鳥の意味）と呼ぶ習慣は偶然ではないと思われる。カザフ人は大昔からなぜ狼のことをイトクスと呼んだのだろうか。それは狼がカザフ（中央アジアのほかの民族も）とシベリア、またモンゴルの人々の民族的な考えでトーテムとして理解されてきたからだと考えられる。

この地域では狼を始祖とする民話、伝説の類は数多く伝えられている。上述のように、狼はイヌ科に属して、犬の祖形に近いことは周知のとおりだと思うが、昔の日本で狼のことを犬、山犬、御犬と呼んで、神聖な象徴として伝説に表したことは中央アジアの諸民族の思考と同様だと思う。狼が神聖視され、神霊、神の使者として人間を助けるストーリーのある伝説を狼祖伝説と呼ぶ。このような大昔の作品で、古き世代の人々が言いつぎ語り伝えてきた説話、民話の中には、彼らが抱いていた考え方や古代の習慣があらわれている。

日本の東洋学者、歴史学者である護雅夫氏は次のように言う。「神話、伝説をなにからなにまですべて、うそっぱちのつくりごととして抹殺してしまうのではなく、それらのなかから、それをいい伝えている人たちの信仰や考え方をさぐり出し、もしできれば、そこにかれらの祭儀のあとさえも見つけるのが、歴史家のつとめのひとつである、と考えています。」（護 1967, 54）、また「これは、そうたやすい仕事でありません。しかし、いろんな学問のたすけをかりるならばやってやれないことではないと思います」（*ibid.*, 54）。

トーテム象徴の謎をどのように解くべきだろうか。それは文学、言語、伝承文学、民俗学、等々科学分野からもっと深い研究を要求するテーマだと思う。日本と中央アジア以外のどんな国々で狼が崇められているだろうか。ヨーロッパにも狐とともに狼を穀物の神、農耕の守護者として崇めることがあるそうだ。日本でもまた狼を大口真神（おおぐちのまがみ）として信仰している。また狼のお守りを盗難よけや疫病よけとしている地方もある。あるいはそれを山の神とあがめて、狼が仔を生むと赤飯や団子、もちなどを重箱に入れて、その穴の入り口においてくる、という風習もあった。「おおかみ、つまり「大神」というその名もそれにたいする畏敬からきているでしょう」（*ibid.*, 55）。

ことばは民族の文化や文学的な考え方の鏡である。日本人は神を大神という。日本語で神様を表す大神と神話や伝説によって神聖な獣、つまりトーテムとして崇められる狼が同音語であることは偶然ではないと思う。大神は大昔から青い空に関する観念である。日本の神話や民話には、天降る上天神的なニギノミコトのような主人公は少なくない。カザフ語で空をコク、つまり「青い」ともいう。また、トーテム象徴である狼をコクボリ、つまり「蒼い狼」という（Жылкыбаева 2010, 8）。

私は著書の中で日本と中央アジアの遊牧民族の始祖、祖先伝説、また神話に表れる狼の謎を解こうと努めている。まず大（おお、だい）という漢字の意味に注目しよう。この漢字は第一に広大、または多量の意を表す（新村出編 1993, 320）。それから尊敬または讚美の意も示す。「大」は重要な意味も含んでいる。狼は遊牧民にとって神聖で、重要なトーテムである。

護雅夫氏は「狼」と「天降る」という要素の意味についてこのように書いている。「まず『狼』についてもういちどいっておくと、こうです。すなわち、それぞれ始祖を、突厥、—阿史那氏族—が牝狼、高車が年老いた牡狼、また、モンゴル民族が蒼い狼として伝え、鳥係がその祖先の一人は牡狼に育てられた、と信じていたのは遊牧という、家畜にすべてのくらしをかけたかれらの生活形態から、たやすく理解されるのです。つぎに『天降る』という要素についていうと、以下のとおりです。すなわち、高車の始祖である老狼が『天からつかわされたもの』と、モンゴル民族の始祖となった蒼い狼が、『上天から命をうけて生まれたもの』と、いや、さらに考えると、突厥—阿史那氏族—の始祖である牝狼が『まるで神霊がそれについているかのように、たちまち、海の東へうつつ、ひとつの山の上へ降りた』、それぞれつたえられていることの謎、つまり、かれらの始祖がいずれも天降ってきていることの謎は、それらを言い継ぎ語り伝えていたものが、おしなべて、最高存在は上天そのもの、または上天にましまし、神はその上天から降臨するという神観念をもつシャーマニズム信者であったことからたやすく解けるのです」（護1967, 75）。

要するに護雅夫氏は北アジア、中央アジアの遊牧民族の始祖・祖先伝説に見える天降った狼の謎は、かれらの遊牧というくらしからうまれた信仰と、かれらのもつシャーマニズムの神観念とから、解けると推測した。

2010年に出版した拙著『日出国の物語』に「狼はコクボリ」という章があり、日本の狼を主人公とする伝説や昔話など伝承作品を翻訳して紹介したが、今回初めて護雅夫氏の本に出会った。日本の学者はカザフにも蒼い狼というトーテム象徴があったことを知らなかったかもしれないが（その本が出版された時代、カザフと日本の科学者たちの間で共同研究がおこなわれていなかった）、中央アジアの各国が独立して以降、新時代の学者たちがこの学説を幅広く研究するべきだと思う。だから中央アジアの古代のトーテムとして理解された狼の象徴であっても、ほかの神話的な、民族的な象徴であっても中央アジア地域の歴史や言語や伝承文学を研究する日本の学者たちにとって重要な分野になると考える。

さて、「狼」という表現のほかの意味もここへ入れておこう。「大」と「神」との二つの漢字から構成された「大神」は日本語で神を敬ってということばである（新村出（編）1993, 323）。中央アジアの遊牧民族（シベリア、モンゴルもちろん）が獣の狼を神として畏敬し、帰依する理由は明白だと思う。

狼はカザフの民族的な考えで勇敢さ、気高さ、横柄さ、名誉、闘志、また愛国精神の象徴として認められてきたのである。カザフの伝説や様々な説話によると、全突厥やアジアの種々の民族の始祖である狼は大昔天降ってきたといわれている。遊牧時代のカザフの国旗にも狼の絵が描かれていた。古代アジアの多様な民族や氏族の旗に狼の絵が表現されていた。カザフの19世紀の詩人スユンバイアロンウルが書いたこの詩句は現代のカザフスタンだけではなく、中央アジアのキルギス共和国においても有名である。

Бері басы — ұраным
Берілі менің байрағым.
Берілі байрақ қолға алсам,
Қозып кетер қайдағым!

狼の頭は旗幟である
僕の狼の旗
狼の旗を揚げると
刺激的になるぞ

(Аронұлы 2009, 32, 日本語訳は筆者)

世界の学者たちは日本民族の起源について様々な仮説を立ててきたが、欧米の科学者たちがとくに日本人は古代カフカス、アルタイ山脈から日本列島に移動してきた民族だという学説を主張した。大体の研究者が日本人の祖先は中央アジアからウラジオストクや朝鮮を越えて、日本の島々に国を建設した氏族の子孫という理論を堅持している。日本と中央アジア、とくに遊牧民の大昔の文化や文学、言語、また風俗習慣の類似点は拙著や筆者が執筆した様々な記事に書いてきたが、日本側の中央アジア研究者たちと力をあわせて研究を続けたい。

参考文献

- Жылқыбаева Шарафат (2010) Күншығыс аңыздары. Алматы: Жалын.
Жылқыбаева Шарафат (2013) Қызыл қақпаның құпиясы. Алматы: Жалын.
Сүйінбай Аронұлы (2009) Берілі менің байрағым. Алматы: Халықаралық Абай клубы.
瀬川拓男・松谷みよこ編 (1973a) 『日本の民話 6 土着の信仰』角川書店
瀬川拓男・松谷みよこ編 (1973b) 『日本の民話 10 残酷の悲劇』角川書店
新村出 (編) (1993) 『広辞苑 (第四版)』 岩波書店
護雅夫 (1967) 『遊牧騎馬民族国家』 豊国印刷株式会社